

ひだまり通信



若き日の思い出

高校生の時、光市に引っ越して来ました。海も山も美しく、広く長い真っ直ぐな道路でした。八幡製鉄光工場や武田薬品光工場があり、活気があり、都会的な空気が感じられました。また、夕陽が大きく綺麗で、本当に心の中からきれいに洗われ、豊かな希望さえ与えてくれる思いでした。戦後の食べる事と生活出来るだけで幸せと言った時代でした。

”Rome was not built in a day” 一番初めに高校の教科書に出てきた格言です。何となく大人になった気持ちになり、人の言葉や格言が、口に出てくるようになり、色々考えるようになりました。外国の大学に行きたいと、夢がどんどん大きく広がりました。しかし、女の子はほどほどの勉強で結婚するのが一番と言う風潮に流され結婚しました。主人は若い医師で、結婚してもほとんど無給で、その上研究費はかかり、やがて子供もでき、大変な時で度々双方の家に居候していました。

子煩悩な父と主人は意気投合して、何とか食べられ、生活出来ていました。そんな時、ある日突然父が「余命1~2年」と話しました。20代の私には全く理解出来ませんでした。それから何とも妙な空気が漂い、気が付いてみると、色々父も考えたのでしょう、“医療法人設立”ということになっていました。医院から病院の設立は想像以上に大変でした。病院になってから間もなく肝心の父を失い、若い私達二人にとってはマイナスからのスタート、全く想像を絶するものでした。ようやく徐々にスタッフも揃い、山口大学医学部からドクターの援助もあり、本当に助かり感謝しました。命に携わるドクターやスタッフの方々の大切さ、大変さをつくづく感じます。色々ありました。今も多事多難、結論の出ない苦悩が山積みです。

今となりましては、何時他人のお世話になるかもしれない私です。せめて私に出来ることはしてあげて、少しでも喜んで笑顔になっていただければ嬉しく思います。

毎日、朝夕、神仏に光中央病院とドクターやスタッフの方々と家族の無事息災を祈っています。

2018年 9月

丸 岩 雅 子
(病院監事)